

〔研究報告〕

出産家族における家族の発達課題に対する父親の取り組み

阿川 勇太¹⁾ 中山美由紀²⁾

要 旨

本研究の目的は、父親への支援について新たな視座を得るべく、出産家族における家族の発達課題に対する父親の取り組みを明らかにすることである。第1子が2歳半になるまでの経験を語れる父親25名に対し、半構成的面接を行った。

出産家族における家族の発達課題に対する父親の取り組みは【子どもの誕生を楽しみに待つ】【自分のライフスタイルを変えようとする】【子育て環境を整える】【父親像を形成する】【子どもとの繋がりを強くする】【夫婦関係を維持できるように努める】【夫婦で家事育児の方針について話し合う】【夫婦の愛情を育もうとする】【妻を中心とした家庭環境をつくる】【家族員としての役割を果たそうとする】【拡大家族との関係を調整する】の11カテゴリに抽象化され、《個人システムにおける取り組み》《夫婦サブシステムにおける取り組み》《親子サブシステムにおける取り組み》《家族員としての家族全体に向けた取り組み》の4コアカテゴリにまとめられた。

この時期の父親においては、【父親像の形成】や【子どもとのコミュニケーションを通じて、愛情を育む】取り組みが促されるように、“他の父親との交流”を図りながら“具体的な育児の方法や手順”“子どもとの具体的なコミュニケーションの取り方”などが理解できるように支援し、【夫婦の愛情を育もうとする】ことをしながら【夫婦で家事育児の方針について話し合う】取り組みができるように、家族が2者から3者関係に変化するにあたって、関係を維持および良好にしていけるような夫婦のパートナーシップの支援が必要であると考えられた。

キーワード：出産家族、家族の発達課題、父親

1. 緒 言

近年、急激な核家族化が進み、今や「夫婦のみの世帯」および「夫婦と未婚の子のみの世帯」が全世帯の約53%（厚生労働省，2017）を占め、約63%の世帯が共働き世帯である（労働政策研究・研修機構，2017）。それに加え、子育て世代においては地域との関係の希薄化（ベネッセ教育総合研究所，2016）も進み、過去に比べると家族成員1人1人の果たすべき役割は大きくなっている。

子育てにおいて父親の育児への参加という部分に

関しては未だ変化がなく、母親に育児負担が重くのしかかっている（小崎，阿川，2018）。父親が家族の営みに参加できていない現状に関して、長時間労働（田中，2016）やかかわり方がわからないなどの知識不足（五十嵐，飯島，2001）などが原因として明らかとされているが、これらに対して是正が図られても大きな変化が見られず父親への支援は手詰まりの状態がここ数年続いている（小崎，2015）。現在広く知られるようになった産後クライシスにおいても、その重大なリスク要因として父親が家族の営みに参加しないことを挙げており（内田，坪井，2013）、父親が家族システムや家族の発達に影響を与えていることから（尾形，2007）、家族を1つの

1) 兵庫医療大学看護学部

2) 大阪府立大学地域保健学域看護学類

ユニットとしたシステム上の問題として父親の育児を捉える必要がある。

父親の家事育児への不参加は家族の発達段階 (Duvall, Miller, 1985) において、第2段階の「出産家族」における発達課題が十分に達成できていない可能性が高い。例えば、出産家族における重要な発達課題として「育児の責任に対処するための相互に満足できる方法を見つける」や「子育ての役割を学習しつつ、家族で役割の調整を行い、家族関係を拡大する」などが挙げられる。この時期、家族は新しい家族の一員を迎える事に適応するために家族としてそれぞれが役割を果たさなければならない。父親の存在は非常に重要である (横川, 斎藤, 宮本他, 1999) が、この時期における父親の家事育児時間は少なく (厚生労働省, 2017), 発達課題の達成に向けて家族の一員として取り組めていないことが推察される。

森岡, 望月 (1992) によると、家族が次の発達段階へ移行するにあたり、新たな発達課題が存在し、その課題に対して取り組むことが求められるため、危機に陥りやすいとされている。家族の発達課題に対して父親がどのように取り組んでいるかを明らかにすることは、発達の移行を促進するための父親支援を考えるにあたり重要であるが、そのような研究はない。

したがって、本研究は出産家族における父親が家族の発達課題にどのように取り組んでいるのかを明らかにすることで、父親への支援について新たな視座を得ることを目的とする。

II. 用語の操作的定義

1. 家族の発達課題

家族には8つの発達段階があり、そこに存在している共通の発達課題を乗り越えることで家族として成長する (Duvall, Miller, 1985) が、新たな発達段階に移行し、その変化した状況や環境に適応しようとする際に形成される課題のことをいう。森岡, 望

月 (1992) によれば、この発達課題が達成できないことで発達の危機を伴うとされている。

2. 出産家族

第1子妊娠から2歳半までの家族基盤を形成してゆく重要な家族の発達段階 (Duvall, Miller, 1985) であり、発達課題は「乳児を家族に結合する」「育児の責任に対処するための相互に満足できる方法を見つける」「子育ての役割を学習しつつ、家族で役割の調整を行い、家族関係を拡大する」である。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、質的記述的研究デザインである。

2. 調査方法

1) 研究参加者

研究参加者は便宜的抽出した関西圏内の8つの保育園及び認定こども園から①第1子が2歳半になるまでの父親としての経験を語れる父親、②子どもに障がい及び先天性疾患がない父親、③婚姻関係にあり同居している父親という条件を満たす父親であり、研究参加への同意が得られた者とした。

2) データ収集方法

①調査期間

調査期間は、平成29年11月25日～平成30年9月28日であった。

②データ収集方法

本研究および面接の協力が得られた研究参加者に対し、半構成的面接ガイドラインに沿った面接を30～40分程度で行った。面接は研究参加者の希望した日時に行い、面接回数は原則1人1回とした。面接場所は、各施設のプライバシーが確保できる個室で行った。面接内容は、研究参加者の承諾を得て、ICレコーダーに録音した。

③調査内容

父親としてどのように家族の発達課題に取り組んでいたかについて、Duvall, Miller (1985) が提唱した出産家族の発達課題を参考に、調査内容を設定し

た。インタビューに回答しやすくするため、「乳児を家族に結合する」を①お子さんを家族の一員として迎えるためにどのような準備をしたか、「育児の責任に対処するための相互に満足できる方法を見つける」を②自分が子育てにおいてどのような役割があると認識し行動したか、「子育ての役割を学習しつつ、家族で役割の調整を行い、家族関係を拡大する」を③育児をするにあたり、よりよい方法を見出すために夫婦でどのような工夫をしたか、④子育てにおける役割調整を、祖父母を含めた家族内でどのように調整を行ったかという簡易な質問形式にそれぞれ変換し、インタビューを行った。

3. 分析方法

インタビューを録音し逐語録に起こしたものを基に、参加者ごとに調査内容を表現している記述を抽出し、コード化した。それらのコードから類似するコードを集めてサブカテゴリを導き出し、生成したサブカテゴリ間の関係性を解釈的にまとめてカテゴリを生成した。さらに、それぞれのカテゴリの特性に着目してコアカテゴリを生成した。

尚、研究の真实性を確保するために家族看護学を専門とする複数の研究者と各段階での確認を繰り返すとともに、研究参加者数名にカテゴリ表を基にメンバーチェックを行った。

4. 倫理的配慮

研究協力を依頼する施設の理事長と園長に、研究趣旨を口頭と文書で説明し、研究協力の同意を得た。また、研究に対する同意が得られた保育施設の園長には、研究参加の条件に適合し、研究参加者になり得る方の紹介の依頼と、面接実施のためのプライバシーが確保できる一室の確保を依頼した。研究参加を希望した父親に対しては、研究の趣旨と自由意思による研究参加、拒否する権利、不利益の回避、研究で知り得た内容を研究以外の目的で使用しないことなどについて説明し、研究参加の同意を得られた場合に研究参加者とした。本研究における倫理的配慮に関しては、大阪府立大学大学院看護学研究科研究倫理委員会の審査を受け、平成29年11月

9日に承認を得た（申請番号：29-45）。

IV. 結果

1. 研究参加者の概要

研究参加者は、便宜的に抽出した関西圏内の8つの保育園及び認定こども園で、長子が3歳児及び4歳児クラスに在籍する父親25名であった。平均年齢は 35.7 ± 5.0 歳であった。また、職業の有無は有りが24名、無しが1名であった。平均帰宅時間は在宅勤務1名、不規則勤務2名を除き、平均20時21分であり、休暇制度の活用の有無においては、研究参加者で育児取得経験者4名であった。里帰りの有無においては、里帰りをしたものが6名であった。

2. 出産家族における家族の発達課題に対する父親の取り組み

逐語録から家族の発達課題への取り組みとして語られている部分を抽出し、コード化・カテゴリ化を行った。その結果、533コードを抽出し、62サブカテゴリに抽象化され、出産家族における家族の発達課題に対する父親の取り組みは【子どもの誕生を楽しむに待つ】【自分のライフスタイルを変えようとする】【父親像を形成する】【夫婦関係を維持できるように努める】【夫婦で家事育児の方針について話し合う】【夫婦の愛情を育もうとする】【子どもとの繋がりを強くする】【子育て環境を整える】【妻を中心とした家庭環境をつくる】【家族員としての役割を果たそうとする】【拡大家族との関係を調整する】の11カテゴリに抽象化された。また、カテゴリの特性に着目し、家族の発達課題達成に向けた《個人システムにおける取り組み》《夫婦サブシステムにおける取り組み》《親子サブシステムにおける取り組み》《家族員としての家族全体に向けた取り組み》の4コアカテゴリにまとめた（表1）。

なお、コアカテゴリを《 》カテゴリを【 】, サブカテゴリを[]で表記した。また、研究参加者の語りを「 」で挿入したが、わかりにくいところは（ ）で言葉を補った。研究参加者の語りの末

表1. 出産家族における家族の発達課題に対する父親の取り組み

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
個人システムにおける取り組み	子どもの誕生を楽しみに待つ	<ul style="list-style-type: none"> ・記念品を購入する ・子どもの誕生に立ち会う ・子どもの名前を考える ・自分から積極的に準備する
	自分のライフスタイルを変えようとする	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事や趣味などと家事育児の調整を行う ・育児をしたいと思いつつ仕事が調整できずに葛藤する ・働き方を見直す
	父親像を形成する	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な資源から父親について学習する ・仕事と家庭での自己実現について考える ・自分が父親であるということを実感する ・父親としての役割がよくわからない ・父親になる実感を得にくい ・父親像や父親の役割について考える
夫婦サブシステムにおける取り組み	夫婦関係を維持できるように努める	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の価値観を妻に押し付けないようにする ・夫婦喧嘩を減らす努力をする ・夫婦で育児ができるようにかかわる ・心からサポートしたいとは思えないがサポートをする ・夫婦の衝突をきっかけに相手の考えていることを理解しようとする
	夫婦で家事育児の方針について話し合う	<ul style="list-style-type: none"> ・家事や育児について話し合う時間を持つ ・家庭内ルールを作る ・子どもへのかかわり方について話し合いをする ・仕事と育児の両立について夫婦で話し合う ・夫婦で育児をする中で、話し合いながら子育ての方針を修正する ・夫婦で話し合い、家族の生活リズムを作る
	夫婦の愛情を育もうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・子育ての喜びを共有する ・妻を労わる気持ちを忘れずにかかわる ・夫婦生活の時間を大切に ・夫婦で楽しく過ごす時間を持つ ・夫婦のコミュニケーションの取り方を工夫する ・夫婦のスキンシップを大切に
親子サブシステムにおける取り組み	子どもとの繋がりを強くする	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもとできるだけ一緒にいようと思う ・子どもとのコミュニケーションを通じて、愛情を育む ・子どもの思いをくみ取りながら育児を行う ・子どもの成長を促そうとする ・子どもの成長を見守る ・子どもを精神的に支える ・里帰り中も子どもの様子を確認し、愛情を育む ・赤ちゃんに触れることですら怖いと感じる ・妊娠中に胎児とかかわる機会をもつ
家族員としての家族全体に向けた取り組み	子育て環境を整える	<ul style="list-style-type: none"> ・子育てがしやすいように住環境を整備する ・産後の育児に必要なものをそろえる ・周囲に子どもが生まれてくることを報告する ・父親同士のネットワークを作る
	妻を中心とした家庭環境をつくる	<ul style="list-style-type: none"> ・妻が家事育児しやすいような家庭環境にできるように調整する ・妻がして欲しいと思うことを引き受ける ・妻の様子を見ながら家事育児をする
	家族員としての役割を果たそうとする	<ul style="list-style-type: none"> ・家の中での力仕事をする ・主に休日に家事や育児を行う ・家事に取り組もうとする ・家族で過ごす時間を作る ・家族に対して責任があると捉え、かかわる ・家族に対して経済的責任をもつ ・子どもの世話をする ・積極的に家事育児に取り組もうとする ・地域の子育て活動に参画する
	拡大家族との関係を調整する	<ul style="list-style-type: none"> ・主に妻の両親と協力して育児に取り組む ・自分の親に子どもと触れ合える時間を作る ・両親を含めて役割調整をせず、夫婦だけで育児ができるように調整する ・妻に両親との役割調整を任せる ・出来る限り夫婦で育児を行い、力を借りないといけない時に主に妻の両親を頼る ・夫婦お互いの実家への育児負担が同じ割合になるように調整する

尾にはケース記号を示した。

次にそれぞれのカテゴリについてデータを示しながら結果を述べる。

1) 《個人システムにおける取り組み》

《個人システムにおける取り組み》は【子どもの誕生を楽しみに待つ】【自分のライフスタイルを変えようとする】【父親像を形成する】という3つカテゴリで構成されている。このコアカテゴリは家族の発達課題に対し、父親個人としてどのように取り組んでいるかを示している。以下にそれぞれのカテゴリについて説明する。

①【子どもの誕生を楽しみに待つ】

【子どもの誕生を楽しみに待つ】は、19コードで構成され、[記念品を購入する]、[子どもの誕生に立ち会う]、[子どもの名前を考える]、[自分から積極的に準備する]という4サブカテゴリに分類された。このカテゴリは産まれてくる我が子を楽しみに待ちながら名前を考えたり、記念品を購入するなどの準備を積極的に行うことや、スケジュールを調整したりして子どもの誕生に立ち会うという取り組みを示している。このカテゴリに象徴的な語りを以下に示す。

「子どもが産まれる時には絶対付き合おうっていうふうには思ってたんで、だいたい9月に生まれるっていうのは分かった時点で、8月終わりから9月の初めまでの出張は全部キャンセルして、(中略)1週間から10日間くらいは大丈夫なようにしました。」

「ずっと名付けをずっと考えてました。基本僕がアイデア出し。」

「結構楽しみながら買い物に行きました。行ったことないような場所でわくわくしながら。そう意味で言うと(妻に)連れていかれた感はなかったっすかね」

②【自分のライフスタイルを変えようとする】

【自分のライフスタイルを変えようとする】は、

21コードで構成され、[仕事や趣味などと家事育児の調整を行う]、[育児をしたいと思いつつ仕事が調整できずに葛藤する]、[働き方を見直す]という3サブカテゴリに分類された。このカテゴリは、父親が子どもの誕生を機に、自分自身が父親役割を担っていかうとして私生活を見直したり、仕事などと家事育児の調整を行ったりしながら、自分のライフスタイルを変えようとする取り組みを示している。尚、産前からライフスタイルを見直していたという語りは見られなかった。このカテゴリに象徴的な語りを以下に示す。

「仕事は仕事って区切るんじゃなくて、仕事と家庭のバランスをどうとるかっていうことを意識しないといけないと思う。そう思って仕事と家庭のバランスをとることを心がけてました。」

「いちばんは仕事の、自分が働き方を変える転換ポイントやったので。生まれたときに転職しようと決めたので、それがいちばん大きいです」

③【父親像を形成する】は、67コードで構成され、[様々な資源から父親について学習する]、[仕事と家庭での自己実現について考える]、[自分が父親であるということを実感する]、[父親としての役割が良くわからない]、[父親になる実感を得にくい]、[父親像や父親の役割について考える]という6サブカテゴリに分類された。このカテゴリは、自分自身がどのような父親であろうかを自分の父親や育児本などの様々な資源から学習して考えたり、実際に父親として役割を果たそうとする中で修正したりして、父親の実感や役割がわからないところから徐々に父親像を形成していく取り組みを示している。このカテゴリに象徴的な語りを以下に示す。

「実際に子どもを育てている知り合いの友人とかそういう方からは、子どもが生まれたらどういう状況になるのかとか、何が必要とかか聞いていました」

「自分がやっぱりちっちゃい時にやってもらって良かった事は、今でもずっと記憶に残っているの。うちの親父も、やっぱりいちばん嬉しかったのはいろんなところに連れて行ってくれたっていうところなんで、自分もそんな父親になろうと思って」

2) 《夫婦サブシステムにおける取り組み》

《夫婦サブシステムにおける取り組み》は【夫婦関係を維持できるように努める】【夫婦で家事育児の方針について話し合う】【夫婦の愛情を育もうとする】という3つカテゴリで構成されている。このコアカテゴリは家族の発達課題に対し、父親が妻との夫婦サブシステムにおいてどのような取り組みをしているかを示している。以下にそれぞれのカテゴリについて説明する。

①【夫婦関係を維持できるように努める】

【夫婦関係を維持できるように努める】は、34コードで構成され、[自分の価値観を妻に押し付けないようにする]、[夫婦喧嘩を減らす努力をする]、[夫婦で育児ができるようにかかわる]、[心からサポートしたいとは思えないがサポートをする]、[夫婦の衝突をきっかけに相手の考えていることを理解しようとする]という5サブカテゴリに分類された。このカテゴリは、妻と協力しながら家事や育児をしていく中で、父親として夫婦お互いが満足できる方法を見出すために、夫婦喧嘩を減らす努力をしたり、妻と衝突しても相手を理解しようとしたりしながら、夫婦関係を維持しようとする取り組みを示している。このカテゴリに象徴的な語りを以下に示す。

「お互い夫婦で育児や家事をしていくっていうところにおいては、価値観が違ってたとしてもちゃんと話し合ってお互いが納得するような答えって見つけないといけないじゃないですか」

「ちょっとしたことやったら、言葉づかいとかふざけんなと思って飲み込んでいうか、スルー

するっていうか、許容できる範囲を広げてケンカしないようにしてる」

②【夫婦で家事育児の方針について話し合う】

【夫婦で家事育児の方針について話し合う】は、54コードで構成され、[家事や育児について話し合う時間を持つ]、[家庭内ルールを作る]、[子どもへのかかわり方について話し合いをする]、[仕事と育児の両立について夫婦で話し合う]、[夫婦で育児をする中で、話し合いながら子育ての方針を修正する]、[夫婦で話し合い、家族の生活リズムを作る]という6サブカテゴリに分類された。このカテゴリは、家事育児を父親として担っていく際に、家族としてどのような方針で行っていくのかを夫婦で話し合っただけで決まったり、夫婦で決めた方針について再度話し合いをしながら修正したりする取り組みを示している。このカテゴリに象徴的な語りを以下に示す。

「妊娠中にさ、嫁と子ども産まれたらどうやって育てていこうかという話をした」

「どちらも同じタイミングで怒らないようにしようというのは二人で決めたことなので、それを実行しています」

③【夫婦の愛情を育もうとする】

【夫婦の愛情を育もうとする】は、81コードで構成され、[子育ての喜びを共有する]、[妻を労わる気持ち忘れずにかかわる]、[夫婦生活の時間を大切に]にする]、[夫婦で楽しく過ごす時間を持つ]、[夫婦のコミュニケーションの取り方を工夫する]、[夫婦のスキンシップを大切に]するという6サブカテゴリに分類された。このカテゴリは、父親が家事育児に取り組んでいくにあたり、夫婦でより良い育児を行っていくためには夫婦の仲が重要であると考え、妻を労ったり子育ての喜びを共有したりしながら、コミュニケーションの取り方を工夫して、夫婦の愛情を育もうとする取り組みを示している。このカテゴリに象徴的な語りを以下に示す。

「あとはその楽しく、まあそれもストレス減らすのにつながるんですけど、夫婦がまず楽しく過ごすことが何よりも大事やと思ったんで。その時その時を楽しく過ごすことが、結果的にはいいんじゃないかなとなんとなく思ってたんで、その時間が取れるようにしていました」
 「スキンシップを良くするようになったんですけど、それからちょっと仲が良くなって。だから今はスキンシップとコミュニケーションをしっかりとっていこうと思っています」

3) 《親子サブシステムにおける取り組み》

《親子サブシステムにおける取り組み》は【子どもとの繋がりを強くする】というカテゴリで構成されている。このコアカテゴリは家族の発達課題に対し、父親が子どもとの親子サブシステムにおいてどのような取り組みをしているかを示している。以下にそれぞれのカテゴリについて説明する。

① 【子どもとの繋がりを強くする】

【子どもとの繋がりを強くする】は、60コードで構成され、[子どもとできるだけ一緒にいようと思う]、[子どもとのコミュニケーションを通じて、愛情を育む]、[子どもの思いをくみ取りながら育児を行う]、[子どもの成長を促そうとする]、[子どもの成長を見守る]、[子どもを精神的に支える]、[里帰り中も子どもの様子を確認し、愛情を育む]、[赤ちゃんに触れることですら怖いと感じる]、[妊娠中に胎児とかかわる機会をもつ] という9サブカテゴリに分類された。このカテゴリは、父親が妊娠中から胎児にかかわる機会を持ったり、最初は怖さを感じたりしながらも子どもとのコミュニケーションを通じて愛情を深めながら、出来るだけ一緒にいられる時間を作って、成長を促そうとしたり、精神的に支えたりしながら、父子間の繋がりを強くしていこうとする取り組みを示している。このカテゴリに象徴的な語りを以下に示す。

「子どものために時間をとって、休みはどっか行

こうとかをやりたいなといちばん思いましたね」
 「生まれてから実際に育児をしていく中で、笑いかけたら笑い返してくれるとかそういうことを繰り返しているとすごく可愛くなってきました。」
 「いろんなところに連れて行ってあげたいっていうのはあって。今どっか行くことによって覚えているかって覚えてないと思うけど、それが人間形成の中には少なからず影響していくと思っているから」

4) 《家族員としての家族全体に向けた取り組み》

《家族員としての家族全体に向けた取り組み》は【子育て環境を整える】【妻を中心とした家庭環境をつくる】【家族員としての役割を果たそうとする】【拡大家族との関係を調整する】という4つカテゴリで構成されている。このコアカテゴリは家族の発達課題に対し、父親が家族の一員として家族全体に対しどのように取り組んでいるかを示している。以下にそれぞれのカテゴリについて説明する。

① 【子育て環境を整える】

【子育て環境を整える】は、48コードで構成され、[子育てがしやすいように住環境を整備する]、[産後の育児に必要なものをそろえる]、[周囲に子どもが生まれてくることを報告する]、[父親のネットワークを作る] という4サブカテゴリに分類された。このカテゴリは、父親として子どもを育てていくにあたり、子どもの安全や成長の側面などから住環境を整えたり、周囲の住人や友人などに子どもが産まれたことを報告しながら、子育てに必要なものをそろえたりネットワークを作るなど、子育てに必要な環境を整備しようとする取り組みを示している。このカテゴリに象徴的な語りを以下に示す。

「引越しました。家も替えましたね。前任ってた所って周りに何も無いマンションで、小学校になって通学する時に結構時間がかかるし、人通りのないところをこう通学するっていう事も考えて」

「あと近所に挨拶行ったよ！それは生まれる直前ぐらいやったかな？これから子ども産まれるんでうさくさくと思えますがよろしくお願ひしますって」

「事前にそういうネットワークって言うか、（父親同士の）そういう仲間を見つけていたっていうことはもしかしたら確かに自分にとっては準備だったのかもしれないですね」

②【妻を中心とした家庭環境をつくる】

【妻を中心とした家庭環境をつくる】は、23コードで構成され、[妻が家事育児しやすいような家庭環境にできるように調整する]、[妻がして欲しいと思うことを引き受ける]、[妻の様子を見ながら家事育児をする] という3サブカテゴリに分類された。このカテゴリは、父親が家事育児に取り組んでいくにあたり、妻の子育てのしやすさや家事のやりやすさが重要であると考え、妻を中心にしながら家事育児が上手く回るように家庭環境をつくらうとする取り組みを示している。このカテゴリに象徴的な語りを以下に示す。

「一番いいのは、妻がほとんど（家事育児を）やるので、妻のやりやすいような家庭の状況っていうの作っていくのがいいなという風に思って」

「基本的に妻がやってほしいということを全部やるようにしてます」

③【家族員としての役割を果たそうとする】

【家族員としての役割を果たそうとする】は、77コードで構成され、[家の中での力仕事をする]、[主に休日に家事や育児を行う]、[家事に取り組もうとする]、[家族で過ごす時間を作る]、[家族に対して責任があると捉え、かかわる]、[家族に対して経済的責任をもつ]、[子どもの世話をする]、[積極的に家事育児に取り組もうとする]、[地域の子育て活動に参画する] という9サブカテゴリに分類された。このカテゴリは、父親が家族の一員として、家族の

中で果たすべき家族員としての役割を考えたり、他の家族員からの要望に応えながらその役割を果たそうとする取り組みを示している。このカテゴリに象徴的な語りを以下に示す。

「その中でじゃあ来月はどこを家族の日にするみたいな、どこ行くみたいな。ある程度スケジュール立てて決める」

「子ども妊娠したって分かった瞬間に、やっぱり自分がもし死んでしまったらどうしようとか、お金稼がれへんようになったらどうしようとかか。そういう心配があったので保険今までかけてなかったんですけども、やっぱりかけておこうかなということでしたね」

「地域の見守り活動とか子育てイベントなどの役割にも参加してますね」

④【拡大家族との関係を調整する】

【拡大家族との関係を調整する】は、34コードで構成され、[主に妻の両親と協力して育児に取り組む]、[自分の親に子どもと触れ合える時間を作る]、[両親を含めて役割調整をせず、夫婦だけで育児ができるように調整する]、[妻に両親との役割調整を任せる]、[出来る限り夫婦で育児を行い、力を借れないといけない時に主に妻の両親を頼る]、[夫婦お互いの実家への育児負担が同じ割合になるように調整する] という6サブカテゴリに分類された。このカテゴリは、徐々に核家族内での調整から拡大家族へと関係を拡大したり、自分の親との関係を調整したりしながら、出産家族という家族の発達段階の移行期にいる自分たちが家族として適応していくための取り組みを示している。このカテゴリに象徴的な語りを以下に示す。

「自分自身も世帯主として、誰かに頼らずともこの家族がうまく回るようにどうしたらいいのかっていうふうずっと考えています」

「自分たちで何とかしていこうと思ってましたが、

実際は共働きやし、おばあちゃんにお迎えに行ってもらったり、熱が出た時は預かってもらったり」

V. 考 察

本研究の結果から、それぞれ4つのコアカテゴリについて考察し、この時期に必要なと考えられる父親支援への示唆を得る。

1. 個人システムにおける取り組み

父親個人としての取り組みとして中心を担っているのは【父親像を形成する】であった。父親像とは“父親としてどのようにあろうか、もしくはあるべきかという父親としてのあり方”（浴野, 2013）である。父親は子どもを実際に目の前にし、自分の父親を参考にしながら役割を考え、その後自分なりに子どもとのかかわりを通じて父親像を修正していた。それと同時に「様々な資源から父親について学習する」で語られた通り、他の父親なども参照しながら役割を学習していた。河本, 田中, 杉下他 (2018) によると、父親になるプロセスにおける父親像の形成は“父親からの影響”“両親からの影響”“他の父親からの影響”を受け、“父親像の形成”に至っていたとされており、本研究においても類似の結果を示した。したがって、出産家族期の父親において、父親像の形成には自分の父親や子どもとのかかわりに加え、身近にいる他の父親が影響している可能性が示された。

また、父親は実際に子どもがいる生活を体験する中で、今まで自分が過ごしてきたライフスタイルではうまく行かなくなり、「育児をしたいと思いつつ仕事が調整できずに葛藤する」という壁にぶつかりながらも、家族や友人の意見を聞きながら「仕事や趣味などと家事育児の調整を行」って【自分のライフスタイルを変えようと】していた。この仕事と育児の両立に父親が葛藤している現状に関しては今までも指摘されてきた（多賀, 2007）が、父親の長時間労働は未だ改善されていない（田中, 2016）。家族の発達課題に父親が取り組む上でも、社会全体と

して父親の労働環境の改善にも取り組んでいく必要性が示唆された。こういった社会の現状に対して、「働き方を見直す」という取り組みをしている父親もあり、家族との時間を大切にするために転職したという語りがあった。そして、自分なりのライフスタイルを確立していく上で、家族としての時間を上手く作り出していた。ここでの語りの特徴は、すべて産後の文脈において語られたということである。産前は、まだ産後の家族の生活を想像できずに、ライフスタイルの見直しまで至っていないことが推察されるが、産後にライフスタイルを見直して葛藤する父親の現状に対しては、産前からライフスタイルの見直しに取り組めるよう支援する必要性が示唆された。

2. 夫婦サブシステムにおける取り組み

父親は夫婦サブシステムにおいて、妊娠中は「夫婦で楽しく過ごす時間をも」ち、「妻を労わる気持ちを忘れずにかかわ」りながら夫婦の愛情を育てていた。しかしながら、2者から3者関係に変わった産後すぐにおいては、お互いに愛情を育む余裕がなくなっていく中で【夫婦関係を維持できるように努め】ていた。その後どうしたらうまく行くかを考え、【夫婦で家事育児の方針について話し合】いながら、「夫婦で楽しく過ごす時間をも」ち、「夫婦のスキンシップを大切にする」などし、【夫婦の愛情を育もうと】していた。親になることに関連する夫婦の関係は、田辺 (2005) の家庭維持因子や森下 (2006) の家族への愛情因子として考察されることはあったが、夫の妻への思いが詳細に取り扱われた先行研究はなかった。本研究では、父親が夫婦サブシステムに対してどのように働きかけているかが明らかとなり、父親が家族の発達課題に取り組むにあたり夫婦関係を重要視していることが示唆された。また、佐藤 (2012) によると、夫婦関係を産前から良好に保つことで母親の育児への肯定感情が増し、父親の家事育児参加をもたらししていることも明らかとなっている。したがって、父親が家族の発達課題に取り組むにあたり、2者から3者にも変わっても夫

婦のサブシステムを維持および良好にしていけるような支援を今後考えていく必要がある。

3. 親子サブシステムにおける取り組み

親子サブシステムにおける家族の発達課題への取り組みにおいては【子どもとの繋がりを強くする】という取り組みを行っていた。その取り組みの中で特徴的であったのが、[子どもとのコミュニケーションを通じて、愛情を育む]という取り組みである。応答的なかわりをする中で[子どもの思いをくみ取りながら育児を行う]ようになったり、子どもの興味やペースに合わせてたりしながら育児に取り組もうとしていた。これは前原、椎葉、渡辺他(2018)が、父親の養育行動における“子どもの関心に合わせた行動”と“子どもの気持ちへ寄り添う行動”が取れるようになるには応答性の側面が影響していたことを報告しているように、本研究においても、[子どもとのコミュニケーションを通じて、愛情を育]み、[子どもの思いをくみ取りながら育児を行]おうとしており、同様の結果が得られた。これにより、“具体的な育児の方法や手順”に合わせて、“子どもとの具体的なコミュニケーションの取り方”などを理解できるように支援する必要性があると考えられた。

4. 家族員としての家族全体に向けた取り組み

父親は、【子育て環境を整え】て子どもを迎え入れつつ、【家族員としての役割を果たそうと】しながら、【妻を中心とした家庭環境をつくる】【拡大家族との関係を調整する】という取り組みをして、3者になった家族が新しい家族システムとして機能するような取り組みを行っていた。

ここで特徴的であったのが、出産家族の発達課題に取り組みながら【拡大家族との関係を調整】していたことである。今まで出産家族における家族の発達課題にどのように父親が関わってきたかという先行研究はなく、同じく家族発達の移行期における家族の安定に対して父親がどのように調整しているかという先行研究もない。本研究においては、父親が子どもの誕生を期にどのようにして家族を調整して

家族発達の移行期に適応していこうとしているのかについての語りが得られたため、その経過に沿って考察する。

家族周期における発達の移行期においては、家族として役割の再調整などを行うことで新たな生活になじんでいく(鈴木、渡辺、2012)。子どもが誕生し3者関係になった際、「自分自身も世帯主として、誰かに頼らずともこの家族がうまく回るようにどうしたらいいのかっていうふうにずっと考えています」という語りがあるように、自分の家族として核家族を捉え、[両親を含めて役割調整をせず、夫婦だけで育児ができるように調整する]という取り組みをしていた。しかし、それでは子育てが上手く回らないという経験をし、[出来る限り夫婦で育児を行い、力を借りないといけない時に主に妻の両親を頼る]という取り組み方に変化していた。また、最初から[主に妻の両親と協力して育児に取り組む]という語りをする父親もいた。この時、どちらの取り組みにも“主に妻の両親”とあるように、ここでは妻の子育てのしやすさを考えて妻の両親と子育てに関する調整をし、【妻を中心とした家庭環境をつく】っていた。本研究では家族発達としての移行期に、妻の子育てのしやすさを考慮しながら拡大家族との役割調整を行い、新たな生活になじんでいこうとしている過程が存在する可能性が示された。

5. 出産家族における父親支援への示唆

出産家族における家族の発達課題に取り組む父親においては、【父親像の形成】や[子どもとのコミュニケーションを通じて、愛情を育む]取り組みが促されるように、“他の父親との交流”を図りながら“具体的な育児の方法や手順”“子どもとの具体的なコミュニケーションの取り方”などを理解できるように支援する必要性が示唆された。また、現在初めて子どもを出産する夫婦が安定した夫婦関係を維持できるように援助することが、周産期看護にとって重要な課題の一つである(杉、香取、2017)ことから、【夫婦の愛情を育もうと】しながら【夫婦で家事育児の方針について話し合】えるよう

に、家族が2者から3者関係に変化するにあたり、父親への支援と合わせて夫婦のパートナーシップへの支援も必要であると考えられた。

VI. 研究の限界と課題

本研究では第1子妊娠中～2歳半になるまでの場面を想起して話していただいたが、語りの中で2人目の出産について語ったものが2名いた。この第1子が2歳半になるまでの間に第2子の出産や拡大家族の介護など、家族の負担が増加する可能性を考慮できていなかった。また、本研究は父親の取り組み内容を明らかにするものであったため、取り組めていない側面については明らかに出来ていない。今後、取り組めていない側面も含めた父親の育児の全体像を把握していくことが必要である。

今回家族員としての家族全体に向けた取り組みの中で、家族発達としての移行期に、妻の子育てのしやすさを考慮しながら拡大家族との役割調整を行い、新たな生活になじんでいこうとしている過程が存在する可能性が示されたが、今後その過程を明らかにし、出産家族への移行期における家族システム全体への支援を検討していくことが課題である。

VII. 結 論

出産家族における家族の発達課題に対する父親の取り組みについては、【子どもの誕生を楽しみに待つ】【自分のライフスタイルを変えようとする】【父親像を形成する】【夫婦関係を維持できるように努める】【夫婦で家事育児の方針について話し合う】【夫婦の愛情を育もうとする】【子どもとの繋がりを強くする】【子育て環境を整える】【妻を中心とした家庭環境をつくる】【家族員としての役割を果たそうとする】【拡大家族との関係を調整する】の11カテゴリに抽象化された。また、カテゴリの特性に着目し、家族の発達課題達成に向けた《個人システムにおける取り組み》《夫婦サブシステムにおける取

組み》《親子サブシステムにおける取り組み》《家族員としての家族全体に向けた取り組み》の4コアカテゴリにまとめられた。

出産家族における家族の発達課題に取り組む父親においては、【父親像の形成】や【子どもとのコミュニケーションを通じて、愛情を育む】取り組みが促されるように、“他の父親との交流”を図りながら“具体的な育児の方法や手順”“子どもとの具体的なコミュニケーションの取り方”などを理解できるように支援し、【夫婦の愛情を育もうと】しながら【夫婦で家事育児の方針について話し合】えるように、家族が2者から3者関係に変化するにあたって、関係を維持および良好にしていけるような夫婦のパートナーシップの支援が必要であると考えられた。

謝 辞

本研究のデータ収集にあたり、お忙しい中、快くご協力いただいた研究参加者の皆様方に心より感謝申し上げます。また、本研究の実施にあたり、研究協力者の選定をはじめ、ご尽力いただきました研究協力施設の理事長様、園長様など、スタッフの皆様方に心より感謝申し上げます。

本研究は2019年3月に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。

各著者の貢献

YAは、研究の着想と企画、データ収集、分析と解釈、論文執筆の全研究プロセスを担当した。MNは、データ分析と解釈、原稿への示唆、研究プロセス全体への助言を行った。著者らは最終原稿を読み、承諾した。

〔受付 19.08.02〕
〔採用 19.12.24〕

文 献

- ベネッセ教育総合研究所：第2回妊娠出産子育て基本調査結果第4章地域のかかわり。 http://berd.benesse.jp/jisedaikenn/research/research_23/pdf/06.pdf 2017.10.03
- Duvall, E. M., Miller, B. C.: Marriage and family development (6th ed.), 157-184, Harper & Row Publishers, New York, 1985
- 沼野雅子：現代の父親についての臨床心理学的一考察，広島文教女子大学紀要，48：29-36, 2013
- 五十嵐久人，飯島純夫：父親の育児参加への意識と育児行動，山梨医大紀要，18：89-93, 2001

- 河本恵理, 田中満由美, 杉下征子他: 父親になるプロセス, 母性衛生, 58(4): 673-681, 2018
- 厚生労働省: 平成28年人口動態調査 年間推計. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikui16/index.html>. 2017.8.20
- 厚生労働省: 日本の一. <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/16-3/dl/02.pdf>. 2017.8.20
- 小崎恭弘: 父親支援に関する全国自治体調査について, CHILD RESEARCH NET. <http://www.blog.crn.or.jp/report/02/220.html>. 2017.8.20
- 小崎恭弘, 阿川勇太: 父親の自主的な活動の考察~我が国における父親サークル調査より~, 生活文化研究, 55: 23-32, 2018
- 前原敬子, 椎葉美千代, 渡辺晴美他: 幼児を持つ父親の養育に影響する要因, 母性衛生, 58(4): 640-647, 2018
- 森岡清美, 望月 高: 新しい家族社会学, 67, 培風館, 東京, 1992
- 森下葉子: 仕事と家庭間で生じる役割間葛藤と父親の発達との関連—共働き家庭の父親の場合—, 文京学院大学人間学部研究紀要, 13: 155-165, 2012
- 尾形和男: 家族システムにおける父親の役割に関する研究—幼児, 児童とその家族を対象として, 263, 風間書房, 東京, 2007
- 労働政策研究・研修機構: 早わかりグラフでみる長期労働統計—図12 専業主婦世帯と共働き世帯—. <http://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/timeseries/html/g0212.html>. 2017.10.03
- 佐藤小織: 初産婦の夫婦関係の評価と育児満足感を構成する諸要因の関係に関する研究—育児初期の核家族に焦点を当てて, 日本助産学会誌, 26(2): 222-231, 2012
- 杉 有希, 香取洋子: 第1子出生前後における夫婦関係の変化の実態とその影響要因の検討—妊娠後期から産褥期に焦点をあてて—, 母性衛生, 58(2): 296-305, 2017
- 鈴木和子, 渡辺裕子: 家族看護学—理論と実践第4版, 15-16, 日本看護協会出版会, 東京, 2012
- 多賀 太: 仕事と子育てをめぐる父親の葛藤—生活史事例の分析から—, 国際ジェンダー学会誌, 5: 35-61, 2007
- 田辺昌吾: 乳幼児の父親が持つ「父親になった実感」とその関連要因—父親の属性及び育児・家事参加度との関連において—, 生活科学研究誌, 4: 1-12, 2005
- 田中健次郎: 父親役割の変遷, 保健の科学, 58(11): 779-785, 2016
- 内田明香, 坪井健人: 産後クライシス, 12, ポプラ新書, 東京, 2013
- 横川絹恵, 斎藤静代, 宮本政子他: 家族看護の意義と研究の動向, 香川県立医療短期大学紀要, 1: 95-104, 1999

Father's Approach to Family Developmental Tasks in Childbearing Family

Yuta Agawa¹⁾ Miyuki Nakayama²⁾

1) School of Nursing, Hyogo University of Health Sciences

2) School of Nursing, Osaka Prefecture University

Key words: Childbearing Family, Developmental Tasks of Family, Father

The purpose of this study is to clarify the father's approach to the developmental task of the family in Childbearing family in order to gain a new perspective on father support. A semi-structured interview was conducted with 25 fathers who can talk about their experiences until the first child reaches 2 and a half.

The father's approach to the developmental task of the family in Childbearing family was abstracted into 11 categories as bellow; **【Looking forward to the birth of their child】** **【Try to change their lifestyle】** **【Prepare of child care environment】** **【Form a father statue】** **【Strengthen relationship with their child】** **【Strive to maintain marital relationship】** **【Discussing household policy with their wife】** **【Try to bring up the love of couple】** **【Create a family environment centered on their wife】** **【Try to play a role as a family member】** **【Coordinate relationships with extended families】**. These categories are grouped into four core categories: «Approach to the individual system» «Approach to the couple subsystem» «Approach to the parent and child subsystem» «Approach to the whole family as family members».

In this period of the father, in order to form a father statue and deepen love with children, it is necessary to support exchanges with other fathers and support so that they can understand concrete childcare methods and communication with children. Also, it was considered necessary to support husband and wife's partnership so that the relationship could be maintained and made better as the family changed from two to three.